様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３４４６

研究課題名（和文）沖縄の小離島における介護と看取りに関連する要因の研究

研究課題名（英文）A study of the factors related to elderly care and the end of life care on small islands of Okinawa

研究代表者
古謝　安子（KOJA, Yasuko）

琉球大学・医学部・教授

研究者番号：３０３０５１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：座間味村の2000年から2010年の死亡葬法調査から、島内死亡者は必ず埋葬し洗骨する伝統的葬儀が島外火葬に転換したことが確認された。住民の洗骨経験率や70歳以上高齢者の埋葬希望率はそれ以前より低下した。死亡者111例中31例の親族の介護看取り体験の質的分析から、介護者は島内医療者の濃厚な支援を得ていたが、島外では不慣れな土地での混乱や負担とともに、離島ゆえの特性が臨終立会いを阻む緊張感を持ちながら介護看取りを行っていた。
小離島の介護看取りには、介護支援の質量とともに葬儀文化や自然環境要因が関連しており、葬儀の転換や介護支援整備により島内介護看取りが増加すると示唆された。

研究成果の概要（英文）：The research of burial methods in Zamami Island between 2000 to 2010 showed that their traditional burial method which the body would be washed after buried has been converted to cremation at the out of the island. The experience of washing the dead persons bones among the citizens and the rate of people seventy and over wishing a natural burial has been decreased. 31 elderly care experiences of the families from 111 deaths have been analyzed in qualitatively. The caregivers received strong support from health care workers on the island. However, out of the island, some had hard time nursing at unfamiliar place with burden and worried if they could be able to be at the family members deathbeds.
The elderly care and the end of life care in small islands are relevant to both in quality and in quantity of nursing support, burial culture and ecological environment. It is suggested that the conversion of burial method and arrangement of nursing support will increase those in the island.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：小離島　高齢者介護　看取り　沖縄

１．研究開始当初の背景

(1)わが国では後期高齢者人口の急増に対応し介護サービス給付の確保と充実を図り、介護予防や介護の重度化防止にむけた包括的な地域の取り組みを推進している。しかし社会の実態は、核家族化による老々介護や認認介護、都会への呼び寄せ・転入高齢者、遠距離介護等を生み出し、介護移民や介護者不在の介護難民など課題が山積している。今後、看取り社会を迎えるわが国では、国民総生産低成長時代における医療費削減や QOL 向上を目的とした早期退院と在宅医療が推進されており、在宅および居住系施設における医療や終末期ケアの体制充実にむけた整備が喫緊の課題となっている。

(2)沖縄県の小離島では 20 年前から超高齢社会に突入しているが、介護サービスが未整備な島もあれば、20 人から 30 人収容の小規模老人ホームが整備された島があるなど、基盤整備状況には離島間格差がみられる。また、入院治療を担う医療施設はないために、急変時や専門的治療、入院のために高齢者が島外に移動しており、入院病院や島外施設で寂しく終末期を過ごしている現状がある。

(3)申請者らは、①介護基盤が整備された島ほど親族支援も豊富にあり、②島の伝統的葬儀がもたらす諸々の負担が高齢者の終末を迎える場所に影響し、③要介護期の暮らし意向は、施設を有する島の老年世代は島外家族派が有意に多く、施設の無い島では島内派が多いなど、島内外の介護の現状が世代間関係に影響している等を明らかにした。

(1)や(2)の背景からは終末期ケアまでを期待する離島高齢者の長期入院は困難になることを示しており、(3)にみる高齢者の家族志向を踏まえ、介護施設の有無のみでなく、介護と看取りを可能にする島内居住体制構築にむけた検討が必要である。

２．研究の目的

(1) 小離島において高齢者が住み慣れた島で介護され看取られることに関連する要因を明らかにすることを目的とする

(2)これまでの研究で、1999 年以前の看取りの場所や伝統的葬儀に関する実態が把握できている小離島座間味村を対象地域とし、村役場と共同体制を構築する。座間味村における 2000 年から 2010 年の看取りの実際を死亡個票等で把握し、住民への質問紙調査や看取り終えた家族への聞き取り調査等により、島内介護及び看取りに関連する要因を分析し、島内居住体制構築への検討を行う。

３．研究の方法

(1)座間味村の行政関係者および介護した住民との信頼関係を構築した上で、村役場に保管された死亡台帳および届書類等から最近 11 年間の死亡に関する情報と葬法について収集し分析する。また以前の研究データとの比較から座間味村の介護と看取りおよび葬法の実際とその変化について検討する。

(2)20 歳以上の座間味村地元住民を対象に、介護と看取り、葬法に関する悉皆調査を行い、先行研究結果との相違から住民意識の変化を考察する。

(3)2000 年から 2010 年の死亡者を看取った親族に同意を得て、その介護看取りの体験を半構成的面接法で調査する。また許可を得て録音し、逐語録にして質的帰納的分析を行い、小離島における介護看取りのプロセスを理解し、課題を抽出する。

(4)調査と並行して、在宅ケア体制や在宅看取りが充実した国内外の先進地を視察し、調査地への還元を考える。

４．研究成果

(1)座間味村の 2000 年から 2010 年の死亡葬法調査から、2000 年以前の島内死亡者の埋葬と洗骨の伝統的葬儀が火葬に転換したことが確認された(図 1)。

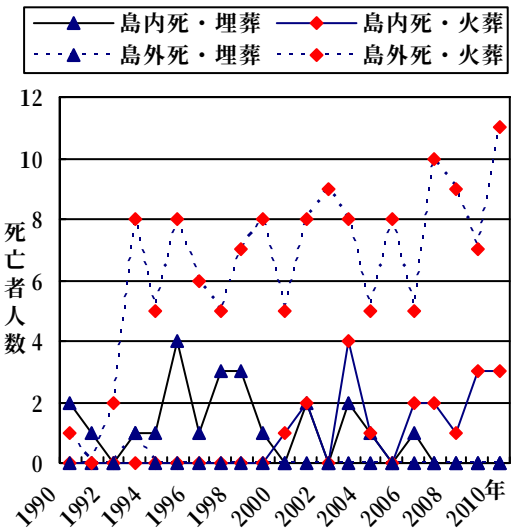

図1　死亡場所別・葬法別死亡の推移

2000 年から 2010 年における死亡者は 111 例で、その内島内死亡は 26 例（23.4%）あったが、埋葬されたのは 6 例であり、残り 20 例は死亡後本島に搬送され火葬されていた。2000 年以前に、「島内死亡者は必ず埋葬し洗骨する」とされた伝統的葬送儀礼とは異なる結果であった。これは、2000 年に島内で死亡したノロ（部落の神事を司る女性司祭者）が、その遺言どおり、親族によって本島に搬送後火葬にされたことが発端になっていた。その後、島内死亡者の火葬は年々増加し、島内での埋葬は 2008 年以降行われておらず、火葬に転化したと考えられた。

(2)住民の介護や看取りの経験、洗骨の経験

や葬法に対する考え等を 20 歳以上地元民に悉皆調査し、有効回答を得た 453 人（有効回答率 64.3%）を解析した。1990 年から 99 年の結果と比較して住民の洗骨経験率は有意に低下し、70 歳以上においては自分の死後処置として埋葬を希望する者は 10%から 3%へ低下していた（表 1）。

表 1　年代別葬法に対する考え

		20-40 歳代	50-60 歳代	70 歳 以上
性	男性	110 (50.0)	75 (60.5)	51 (46.8)
	女性	110 (50.0)	49 (39.5)	58 (53.2)
介護** 経験	有	27 (12.6)	31 (26.5)	26 (27.7)
	無	187 (87.4)	86 (73.5)	68 (72.3)
看取り* 経験	有	54 (25.5)	40 (34.5)	35 (39.8)
	無	158 (74.5)	75 (65.2)	53 (60.2)
葬法に対する考え***				
埋葬残して		6 (2.8)	2 (1.7)	2 (2.0)
本人決める		95 (44.4)	23 (19.8)	24 (24.2)
火葬がよい		113 (49.8)	65 (54.6)	63 (63.6)
埋葬は廃止		22 (10.3)	29 (24.4)	10 (10.1)
自分の死後処置の希望 n.s.				
埋葬がよい		2 (1.0)	2 (1.7)	3 (2.9)
火葬がよい		207 (99.0)	117 (98.3)	100 (97.1)

*=P<0.05,　**=P＜0.01,　***=P＜0.001,　n.s. 有意差なし

介護経験は、20-40 歳代と 50 歳以上に有意差がみられ、50-60 歳代と 70 歳以上には差がない。一般的にシニア層ほど介護経験率は高くなるとの結果があるが、座間味村では病院や介護施設がなく要介護高齢者は本島に移動するため、島内に居住する 70 歳以上高齢者が介護を担う機会が乏しいためだと考える。また葬法に対し、埋葬を残してほしいと考える者は少なく、自分の死後処置の希望は殆どが火葬であった。本島では地縁や血縁に縛られず葬儀が変容していく中で、離島においてもさらに変化すると推察され、その推移に着目する必要があると考える。

(3)2000 年から 2010 年に死亡した 111 例中 31 例の親族から許可を得て、介護看取り体験を聞取った。データ分析は M-GTA による継続的比較分析法を用い、直接データから概念を生成し、複数概念の関係からカテゴリーを生成したあと、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、結果図を作成し、その概要を文章化した。小離島で暮らす家族を介護し看取るプロセスを分析テーマとし、分析焦点者は要介護者を介護し看取った者とした。その結果、「小離島で暮らす家族を介護するプロセスは、要介護者の自立度と島内医療介護限界とのバランスの中で、介護使命感を支えに、介護ど壺にはまりながらも相互の絆がいつか無抵抗介護の安楽をもたらし、医師らの濃厚支援で在宅看取りを実現させ得る一方、要介護者が島外移動すると不慣れな土地で介護者の負担や混乱は続き、さらに離島ゆえに悪天候が臨終立会いを阻む可能性を抱え、その緊張感を抱きながら行なわれた。」と理解できた(図 2)。

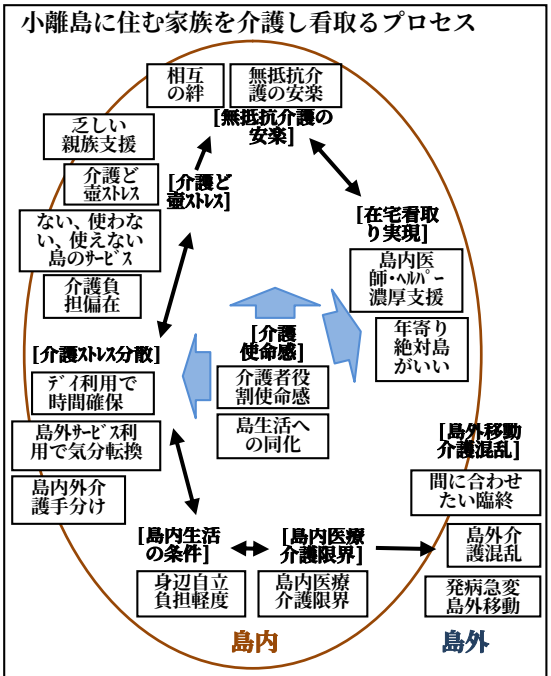

図 2　結果図

小離島の介護看取りには、介護支援の質量とともに葬儀文化や自然環境要因が関連しており、今後、葬儀の転換や介護支援整備により島内内介護看取りが増加すると示唆された。

(4) 座間味村の在宅ケアや島内看取りに関する現状認識と将来目標を共有するため、座間味村保健福祉担当者及び社協職員ら 3 人と国内先進地を視察した。夢のみずうみ村山口県デイサービスセンター及び小規模多機能居宅介護「夢ハウスゆだ」は、平成 25 年版高齢社会白書に「生活力回復を促す介護」として紹介されている。視察後、座間味村職員らから、その取り組みの斬新さや高齢者の意欲を引き出すアイデアを島の介護サービスにも取り入れたいとの報告を得た。また、住民や高齢者にも「人生現役養成道場」と掲げた同施設の真髄を伝えるため、理事長の藤原茂氏の講演会を阿嘉島と座間味島の両島で企画したが、当日天候不良のため全便欠航し開催できなかった。平成 26 年度に実施する予定である。

国外視察は、世界で初めて介護保険制度（年齢制限なし）を導入したオランダの「ケア付き高齢者住宅視察団」に同行し、農村型認知症デイケアや年間 100 人を看取る住宅地の中のホスピスなど、地域特性に応じた多様な高齢者ケア施設を視察することができた。これらの情報を小離島の高齢者介護や看取り体制の構築にも適用できるよう、島の多職種と連携し推進していきたい。

5．主な発表論文等

（研究代表者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①古謝 安子、沖縄県小離島における高齢者介護と伝統的葬送文化、Ryukyu Med. J.、査読有、32 巻、1，2 号、2013、1-6

②古謝 安子、小離島高齢者の終末期と文化、日本看護研究学会雑誌、査読有、36 巻、1 号、2013、12-14

③古謝 安子、與古田 孝夫、豊里 竹彦、小笹 美子、當山 裕子、宇座 美代子、火葬場のない沖縄県小離島における死亡状況と葬法に関する住民意識の検討、民族衛生、査読有、78 巻、5 号、2012、109-119

〔学会発表〕（計　4　件）

①古謝 安子、小離島で暮らす家族を介護し看取るプロセス～M-GTA を用いた介護・看取り体験の分析、第 3 回日本在宅看護学会、2013 年 11 月 16 日、東京都東邦大学看護学部

②Y Yasutomi, T Toyosato, T Yokota, Y Koja, Relationship between physical and mental health, and job satisfaction in visiting nurses in Okinawa, 9th INC & 3th WANS, 2013/10/16-18、The-K Seoul Hotel, Seoul, Korea

③古謝 安子、國吉 緑、與古田 孝夫、豊里 竹彦、火葬場のない沖縄県小離島における葬法と葬法に関する住民意識の変化、第 71 回日本公衆衛生学会、2012 年 10 月 24 日-26 日、山口県山口市

④古謝 安子、小離島高齢者の終末期と文化、第 38 回日本看護研究学会（招待講演）、2012 年 07 月 07 日-08 日、沖縄県宜野湾市

６．研究組織

(1)研究代表者

古謝　安子（KOJA, Yasuko）
琉球大学・医学部・教授
研究者番号：30305198

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者

國吉　緑（KUNIYOSHI, Midori）
琉球大学・医学部・教授
研究者番号：80214980

與古田　孝夫（YOKOTA, Takao）
琉球大学・医学部・教授
研究者番号：80220557

豊里　竹彦（TOYOSATO, Takehiko）
琉球大学・医学部・講師
研究者番号：40452958